

佛教大学 歴史学部論集 第3号 (2013年3月)

宋代明州城の都市空間と楼店務地 (上)

山 崎 覚 士

〔抄 録〕

宋代の都市研究では、地方都市の解剖がほとんど進んでいない。本稿では、『開慶四明統志』巻七「楼店務地」条に注釈をほどこしたうえで、宋代地方都市の一つである明州城の都市空間を復元する。楼店務地（官有地）には三等九則のランクがあり、これらを復元することによって、官有地の高下が判明する。したがって明州城の都市空間とその構造が解明される。

キーワード 明州、楼店務地、開慶四明統志、都市空間、唐宋変革

はじめに

第一章 『開慶四明統志』巻七「楼店務地」条注釈

第二章 楼店務地と都市空間（以下「宋代明州城の都市空間と楼店務地（下）」）

第三章 軍営と都市空間

おわりに

はじめに

唐宋変革期における都市は、当該社会の経済的発展と商業・流通の全国的展開の基礎であり、そうした社会上の発展にともなって都市（市鎮を含む）も成長した。斯波義信氏は、こうした社会変革をあるいはまた〈社会の都市化〉とも称している⁽¹⁾。そのように呼ぶことは別として、唐宋変革期において都市社会上に大きな変化が生じたことは確かである。いわゆる侵街等による坊牆制の崩壊、夜市の登場、邸店・酒楼・市場の増加、禁軍・廂軍の都市内設置と都市人口に占める軍人の増加、また貧窮・老病人などの増加と社会救済施設の設置、市鎮の簇生等々、唐から宋にかけて都市の景観⁽²⁾は大きく変化した。

したがって宋代の都市研究は中国の歴史上重要な課題であり、これまでも多くの成果が出されてきた。しかしながら史料状況などによって、取り上げられる都市は都城である開封や臨安であることが多い⁽³⁾。また都市研究の基礎となる都市空間の復元にあたってもやはり開封や臨安が取り上げられ、地方都市がその対象となるのは「宋平江図」の残る蘇州⁽⁴⁾を除いてほとんどなかった。しかし都城は都市であっても、都市すべてが都城であるわけではない。皇帝

が君臨し中央官府の集中する都城はやはり都市の中でも特殊であり、都城の特徴は全国の都市に一般ではない。都城である開封や臨安の性格を浮き彫りにするためにも、また宋代都市を一般化するためにも、地方都市の解剖が喫緊である。またアメリカの宋代史研究では、地方都市における文化・士大夫へ関心が向けられており、ますます宋代地方都市研究が重要な課題となっている⁽⁵⁾。

都市研究の第一歩は、対象とする都市空間の全体像を復元することである。もちろん、制度史的に都市税や救済施設などを追いかけてゆく方法もあるが、一都市全体としてどのような空間構造であるかを究明することによって、制度史とはまた違った都市社会全体の相貌を見ることが出来る。

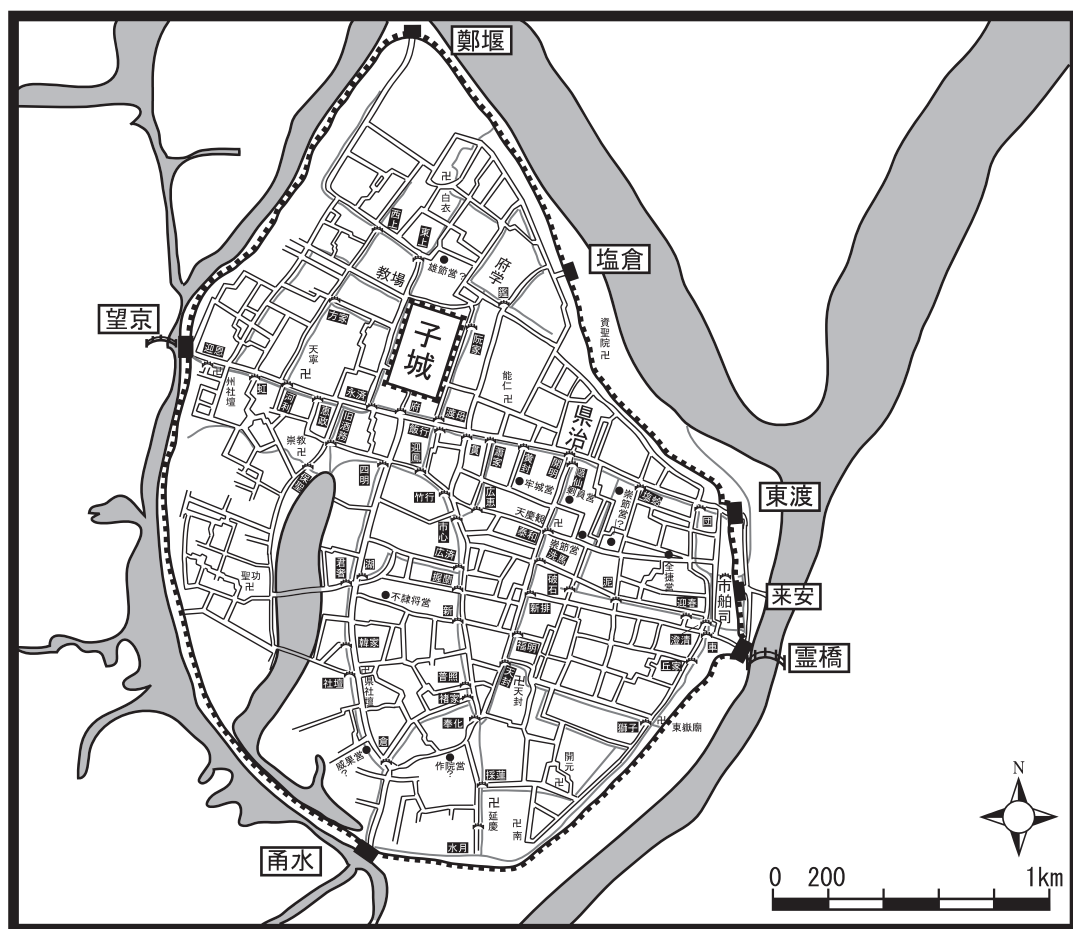
本稿では以上のような視点に立ち、宋代の地方都市である明州（南宋には慶元府）城を取り上げ、宋代都市研究の一助としたい。明州城は、宋代には東アジア海域交易の玄関口として発展した海港都市である。その意味では都市一般ではなく特殊ではあるが、宋代に見られた都市発展の諸特徴を兼ね備えており、地方都市の一典型とみて差し支えない。明州城の復元に関しては、斯波氏が清末の都市空間を復元しており⁽⁶⁾、宋代の都市空間について理解の助けとなる。本稿における復元図の下図は斯波氏の作成したものを加工し利用した。また梅原郁氏は宋代都市の税賦を論ずる論考の中で、宋代明州城を大まかに復元している（水路・橋梁が中心⁽⁷⁾）。こちらでも復元図作成に当たっては大いに参考となるが、一部理解を異にするところもある。また筆者は明州城における海上貿易と都市空間の関係を論じたが、それは明州城の東南部という一部分のみを復元するにとどまった⁽⁸⁾。やはり明州城全体を復元しなければならない。

明州城は余姚江・奉化江・甬江によって周囲を取り囲まれており、時代を通じて都市区域の変動がほとんどないため復元しやすい。その点では、沙漲現象によって時代とともに都市区域が東に拡大していく杭州城とは大きく異なる。また『乾道四明図経』をはじめとする明州の宋元地方志が五種残っており、『嘉靖寧波府志』や『康熙鄞県志』など明清時代の地方志も多いので、地名などの追跡調査が行いやすい。さらに清の順治年間に作成された『敬止録』（『北京図書館古籍珍本叢刊』所収）もあり、寧波出身の清・全祖望撰『鮑埼亭外集』には寧波地理を考証しており有益で、清代の『乾隆鄞県志』にも取り入れられている。そのほか、清・徐兆昌『四明談助』、『民国鄞県通志』（『中国地方志集成』所収）、また『寧波市地名志（市区部分）』第一冊（寧波市地名委員会、1993年⁽⁹⁾）など参考にしうる文献が豊富であり、宋代明州城の復元をしやすい史料状況にある。

さらに地図史料として『宝慶四明志』に載せる図が参考になる⁽¹⁰⁾。そこでは実際には卵型の都市空間が中国の伝統的都市空間である方形に描かれているが、街道や水路・施設などを描いており有益である。民国期の『寧波市全図』（中華民国十八年、寧波市政府製）も大いに役立ってくれる。またアメリカの Library of Congress 所蔵の『寧郡地輿図』（嘉慶年間 [1796-1820] 作成。113cm×96cm、2500分の1）はカラー刷りの寧波城図であり、官署や寺院、橋梁、

水路などが描かれていて、復元図作成にあたって大いに参考とした。なお、本図は Library of Congress の HP よりダウンロード可能である。

それらの資史料を通じて明州城の復元が可能だが、その都市空間を解剖・理解する上でより一層重要なものが『開慶四明統志』巻七「楼店務地」条に載せる明州城楼店務地の三等九則（実際には十則）のランク付けである。楼店務地とは、都市内部における官有地および家屋であり、民間等に租賃に出して楼店務錢を徴収する土地のことである⁽¹⁾。紹興經界法の実施によって、明州城内の楼店務地が第一等地から第三等地にランク付けされ、さらに等内で上中下（第三等地のみ末則を加える）に区分された。これらのランク付けはおそらく楼店務錢の高下に影響したとみられるが、同条にはその地をくわしく書き残している。ありていに言えば、都市の地価のごときが知られる。こうした史料は宋代で他に例を見ず貴重である。それらの地を復元することによって、明州城内において、どの地のランクが高く、どの地が低いのか、そしてそこにはどのような施設があり、また特徴があるのかを知ることができる。宋代地方都市の空間構造の解明に大いなる進歩をもたらしてくれる。よって本稿ではまず、楼店務地条に注釈



寧波図橋梁建物

をほどこして各等地の復元を行ったうえで、宋代明州城の都市空間と樓店務地の分析を行うこととする。なお、参考までに下に南宋初期の明州城復元図を付しておく。

第一章 『開慶四明統志』 卷七「樓店務地」条注釈

〈凡例〉

- 一、地図の元図として、斯波義信「寧波の景況」附「図8 清末の寧波市」を使用したか、部分的に変更したところがある。
- 一、参考文献は以下のように略記する。『宝慶四明志』→『宝慶』、『開慶四明統志』→『開慶』、『延祐四明志』→『延祐』、『至正四明統志』→『至正』（以上『宋元方志叢刊』所収）、『嘉靖寧波府志』（『中国方志叢書』所収）→『嘉靖』、『敬止録』（『北京図書館古籍珍本叢刊』所収）→『敬止』、『康熙鄞県志』（『中国地方志集成』所収）→『康熙』、『乾隆鄞県志』（『続修四庫全書』史部地理類所収）→『乾隆』、『四明談助』（寧波出版社、2000年）→『談助』。
また地図史料については『宝慶四明志』「羅城図」（『中国方志叢書』所収）→〈羅城〉、『寧郡地輿図』（Library of Congress 所蔵）→〈地輿〉、「寧波市全図」→〈全図〉。
- 一、地図上の樓店務地の復元線について、たとえば原文中に「市廊西街北岸」や「～東岸」などと表記されているが、復元にあたっては便宜上捨象することとした。

〈原文〉

樓店務地

紹興經界^①内該載樓店務地^②、計二萬九千九百三十丈二尺五寸、及分等則、今略具如后。

- ① 紹興經界 南宋時代に全国で実施された検地・検田事業であり、それにともない土地台帳・絵図の作成がなされた。紹興十二年（1142）に李椿年が蘇州で始めたのを皮切りに、ほぼ全土に実施された。
- ② 樓店務地 都市坊郭の官有地と家屋を管理する官署を樓店務（開封では店宅務ともいう）といい、樓店務地はその官有地をさす。おもには租賃に出され、借り受けた者は房錢（家屋賃貸料）・廊錢（倉庫使用料）・白地錢（土地の借地料）等（あわせて樓店務錢）を支払った。

第一等地

〔上則〕 東安郷。自府前街¹兩岸取四明橋²。自能仁寺³前市廊西街北岸⁴至貫前巷口⁵。自貫前巷口市廊南北岸止永濟橋⁶。

- 1 府前街 府とは州治あるいは州治の置かれた子城を指す。子城の正門である奉国軍門より南に延びる街路が府前街であろう (『宝慶』卷三)。なお慶元元年 (1195) に寧宗が登位すると、その年の十一月二十四日に明州は慶元府に昇格した (『宝慶』卷一)。
- 2 四明橋 府の南九十歩に位置する。唐の大和三年 (829) に建設された。南宋の建炎年間に焼失したが乾道五年 (1169) に再建された (『宝慶』卷四)。なお、開慶年間に呉潜が橋の西に水位を計る石を建てたのちには平橋と呼ばれたという (『嘉靖』卷五・『敬止』卷六)。〈全図〉にあり。
- 3 能仁寺 または能仁羅漢院と称し、鄞県の西半里にあり。唐代には乾符寺と呼ばれ、咸通八年 (867) の再建後には薬師院、またのちに承天寺とも称した (『宝慶』卷十一)。能仁寺巷口に富栄坊がある (『宝慶』卷三)。〈羅城〉にあり。
- 4 市廊 未詳。ただし東渡門・望京門を結ぶ東西街路のうち、東渡門より子城あるいは県治あたりまでを市廊と称すか。なお斯波義信編『中国社会経済史用語解』(東洋文庫、2012年) には「商業の盛んな街巷を、市の房廊という意味で市廊と呼んだ」(p. 363r) と解する。
- 5 貫(橋) または千歳橋・万歳橋ともいう。府の東南百歩に位置する。後周広順二年 (952) に建設された (『宝慶』卷四)。〈地輿〉〈全図〉にあり。
- 6 永濟橋 路分衙前の前、府より60歩のところに位置する。景德四年 (1007) に僧惟一によって設立された (『宝慶』卷四)。〈羅城〉に「路分所」「永濟坊」あり。

〔上則〕 武康郷。自能仁寺巷口市廊取東渡門⁷南北岸。及自稅務橋⁸阿滿門首取鰲團⁹内、歸西止團¹⁰橋林保門前往。并靈橋門¹¹直取宋端仁舊食店、今施崇住。及自車橋¹²北巷口入兩岸、取鄭允客店、今吳獻可住。

- 7 東渡門 羅城東門の一つ (『宝慶』卷三)。奉化江・余姚江・甬江の合わさる三江口につながり、商業・交通上の要所であった。宋代には門内側に都稅務が置かれた (注(8)参照)。〈羅城〉〈地輿〉にあり。
- 8 稅務橋 東渡門内側に位置する。景德四年 (1007) に設置された (『宝慶』卷三)。なお、門外に都稅務の亭 (「瓌富亭」) が置かれ、商人の荷物チェックや徴税が行われた (『開慶』卷二)。〈羅城〉にあり。
- 9 鰲團 未詳。干した魚 (「鰲」) を扱う同業組織か。
- 10 團橋 東渡門内側に位置し、府より二里二十歩隔たる (『宝慶』卷三)。また北は大街にいたり、南は鹹塘匯街に達すという (『康熙』卷七)。
- 11 靈橋門 羅城東門の一つ (『宝慶』卷三)。門より東に奉化江を渡るために、船十数隻を並べて板を渡した浮橋が備えられた (『宝慶』卷十二)。〈羅城〉〈地輿〉〈全図〉にあり。

- 12 車橋 靈橋門の西に位置し、府より四里四十五歩隔たる（『宝慶』卷四）。また東にできれば靈橋門、西に向かえば新排橋、南には獅子橋に達するという（『康熙』卷七）。〈全図〉に「車橋街」あり。

〔中則〕 東安郷。自貫前南西兩岸取市心橋¹³。自南湖頭西取舊酒務橋¹⁴。自四明橋南取行衙前¹⁵、至君奢橋¹⁷并舊瓦子¹⁸內。自永濟西街南北兩岸直取朝京門¹⁹住。

- 13 市心橋 南湖頭の南に位置し、府より一里隔たる（『宝慶』卷四）。また北には千歳坊、南には漁（呉）欄橋にいたる（『康熙』卷七）。〈地輿〉にあり、〈全図〉には市心橋直街を載す。

- 14 南湖頭 千歳坊が位置する（『宝慶』卷三）。千歳坊については〈地輿〉〈全図〉にあり。

- 15 舊酒務橋 都酒務は美祿坊に位置し、子城より西南百十歩の距離にある。天禧五年（1021）に設置されたが、紹興五年（1135）にその地に通判南庁が置かれたために、酒務は平橋下街の高麗館（「高麗行衙」）に移された。淳熙七年（1180）に宰相史浩にその地が下賜されたのちは、酒務は月湖西の観音寺側に再度移った。嘉定元年（1208）に通判南庁が廃止されると、酒務は元の地に復活した（『宝慶』卷三）。また『嘉靖』卷五には醋務橋（旧名酒務橋）が見え、崇教寺側に位置したという。〈羅城〉には「美祿坊」「三酒務」「西醋庫」が見え、〈地輿〉〈全図〉には「醋務橋」あり。

- 16 行衙前 未詳。あるいは高麗行衙か。高麗行衙は注(15)にあるように、平橋下街に位置し、のち寶奎精舎となった（『宝慶』卷三）。高麗行衙は政和七年（1117）に樓昇の建議によって置かれ（「高麗司」）、高麗使の送迎等に利用された。〈羅城〉〈地輿〉に「寶奎廟」あり。

- 17 君奢橋 湖橋の東に位置し、府より二百歩隔たる（『宝慶』卷四）。また北には平橋、南には鎮明嶺に達す（『康熙』卷七）。

- 18 舊瓦子 未詳。瓦市とは盛り場をいい、芝居・講談・雑技などが催された。

- 19 朝京門 羅城西門の一つ。また望京門ともいう。漕運のための水門がある（『宝慶』卷三）。〈羅城〉〈地輿〉にあり。

〔中則〕 武康郷。自貫橋南東岸一帶直取市心橋、復回東向南北兩岸至廣惠寺橋曹承富門²⁰前住。對南岸自周孚門首²¹、并自縣南街東西兩岸至大梁街巷口西岸、係史武翼²²賃屋門前東岸街、止天慶觀橋²³。及自丘家橋北至車橋南趙漳門前²⁴。并自宋端仁²⁵舊食店門前取新排橋。

- 20 廣惠寺橋 廣慧橋は大梁街にあり、府より一里五十歩隔たる（『宝慶』卷四）。『嘉靖』卷五には廣惠橋は萬寿寺の西にあるとする。〈地輿〉に「廣慧橋」、また〈全図〉に「萬寿寺」あり。

- 21 縣南街 県とは鄞県治を指し、子城の東二百八十歩に位置した（『宝慶』巻十二）。なお元の至大二年（1309）に県治が廉訪分司署となって以後、幾たびかの変遷を経て、県治は明の洪武六年（1373）に乾符・竹林寺の跡地（宋代県治の西）に落ち着いた（『康熙』巻三）。
- 22 大梁街 注²⁰にあるように、大梁街には廣慧橋が架かる。また大梁街は廣惠坊・萬寿坊とも言った（『開慶』巻一・『康熙』巻二十三）。〈全図〉にあり。
- 23 天慶観橋 天慶観は子城の東南一里にあり。唐の天宝二年（743）に置かれた（『宝慶』巻十一）。明代には冲虚観（清代には三元殿）と改められる（『談助』巻二十七）。〈地輿〉に「三元殿」、〈全図〉に「冲虚観」あり。
- 24 丘家橋 迪教坊の南にあり、府より四里半隔たる（『宝慶』巻四）。また『延祐』巻十六には興教寺があったとする。注¹⁴も参照。
- 25 新排橋 泥橋頭の西に位置し、府より二里半十二歩隔たる（「新牌橋」『宝慶』巻四）。また西は大街にいたり、東は車橋に達するという（『康熙』巻七）。

〔下則〕 東安郷。自君奢橋南取倉橋。²⁶自甬水門²⁷取威果營²⁸前細湖頭²⁹、至奉化橋³⁰。自花行至飯行³¹五通巷新瓦子³²。自太保衙前³³寶雲寺³⁴前至新排橋³⁵。自貫前巷北法場³⁶東西岸至能仁寺西巷、以王彦升門³⁷前直至寺前西岸、西至東僉判衙前廟住。

- 26 倉橋 振名坊の南に位置し、府より二里半隔たる。倉橋下には順成坊あり（『宝慶』巻四）。また東は大街にいたり、西は鎮明嶺に達するという（『康熙』巻七）。〈地輿〉〈全図〉にあり。
- 27 甬水門 羅城南門の一つで漕運のための水門を備えた（『宝慶』巻三）。〈羅城〉〈地輿〉にあり。
- 28 威果營 西南廂順成坊の北に位置する。この軍営は威果三十營のことであり、嘉祐五年（1060）に荆南から派遣された就糧禁軍である（『宝慶』巻七）。〈羅城〉にあり。
- 29 細湖頭 日湖をまた細湖頭という（『宝慶』巻十二）。また採蓮橋より捧花橋一帯を小湖（あるいは細湖）といった（『談助』巻二十一）。
- 30 奉化橋 龍舌頭（後世には三角地という）に位置し、府より三里隔たる（『宝慶』巻四）。〈地輿〉にあり。
- 31 花行 未詳。行とは官の必要とする物資の調達（御用達）をおこなう同業組織をいう。
- 32 飯行 未詳。ただし『嘉靖』巻五には飯行橋の旧名を葱行橋とし、『敬止』巻六によると県前河に架かる橋として蕭家橋から西に行って貫橋、飯行橋（旧名恵行）と架かるという。
- 33 五通巷新瓦子 未詳。ただし『宝慶』巻四には、義井の一つとして西南廂「五通堂巷口」を挙げている。この義井について『嘉靖』巻五では「参議廟井」といい、県治（明

代)の西四十歩に位置するという。

34 太保衙前 未詳。

35 寶雲寺 行春坊の東に位置する（『宝慶』卷三）。また『敬止』卷二十六には鄞学の東とし、『談助』卷二十二によれば明の弘治十三年（1500）に竹湖坊戒香寺跡地に移転したという。注(97)を参照。なお、以下に続けて「新排橋に至る」とするが、位置がずれることになる。あるいは「新橋」（注(55)）の誤りか。「新橋」ならば穏当である。

36 北法場 未詳。法場とは死刑執行の場所。なお貫橋の東側に蕭王廟があり、かつて行刑の地であったという（『延祐』卷十五、〈地輿〉）。この地をいうか。

37 東僉判衙前廟 未詳。僉（簽）判とは、州長官の政務を助け文書処理をあつかう僉書判官庁公事あるいはその役所をいう。なお『延祐』卷八には萬戸府について西北隅永濟坊（注(6)）、すなわち宋の僉判庁に位置するとし、〈羅城〉にも同地に「僉判所」が描かれているが、やはり東僉判衙前とは別であろう。

〔下則〕 武康郷。自貫橋取東河³⁸下南北兩岸、直至鹽蛤橋³⁹曲轉取鹹塘街⁴⁰東西兩岸、東至吳獻可⁴¹客店元係鄭允⁴²屋。并自蕭家橋⁴³南街東西兩岸直取廣惠橋⁴⁴下曹承富⁴⁵門前、復轉曲西取縣學前南北兩岸、至巷林岳⁴⁶賃屋及林家小巷縣西河下。并自新排橋東取景福巷口。

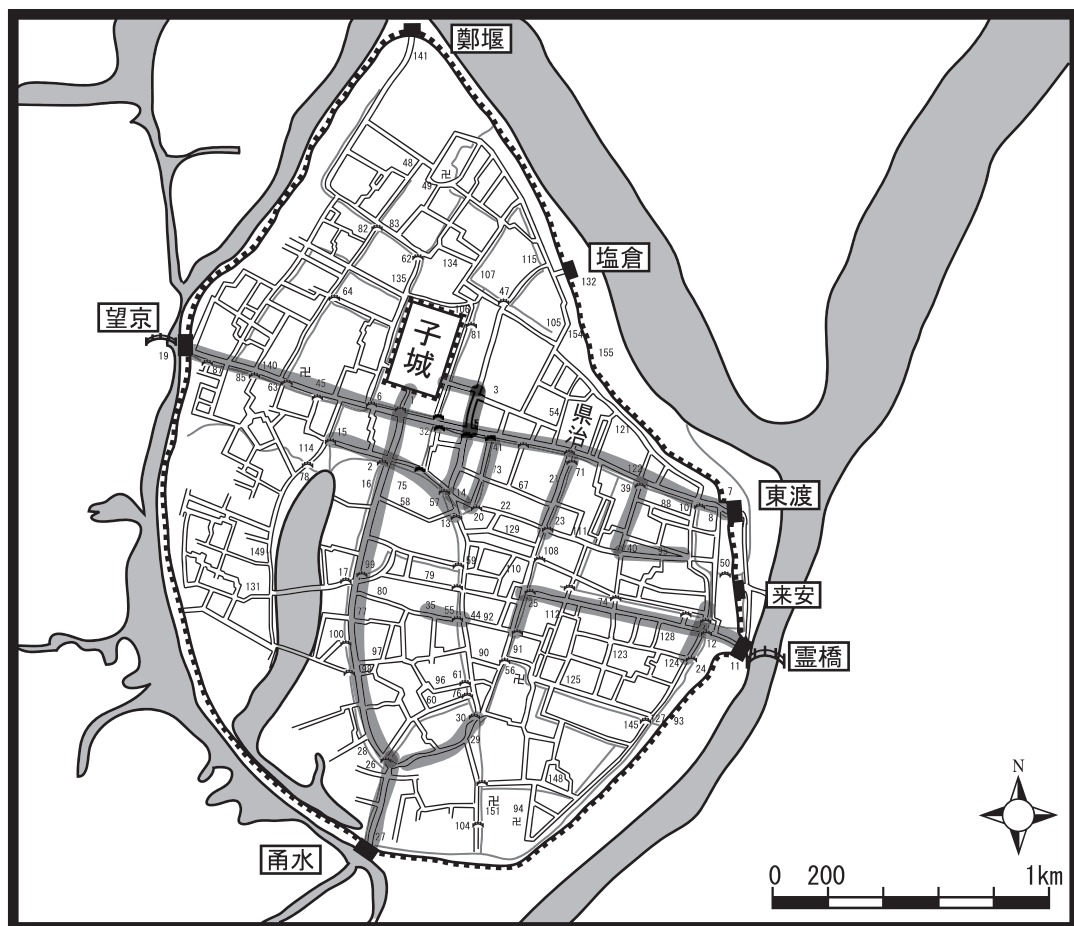
38 東河 未詳。ただし『宝慶』卷四に「黄家橋」が東河の南のはてに位置し、府より二里半隔たるとする。

39 鹽蛤橋 府の東南二里半に位置し（『宝慶』卷四）、団橋の西にあたる（『嘉靖』卷五）。また『敬止』卷六では県前河の東側に架かる橋として、順に黄封橋・開明橋・積善・余慶二橋・琅邪橋・係家橋・塩蛤橋・団橋と並べている。

40 鹹塘街 市舶司後橋の西に位置し（『宝慶』卷四）、『康熙』卷七では、鹹塘匯橋は東は東城壁にいたり、西は冲虚觀前街にいたるとし、また海神廟があるとする。〈地輿〉〈全図〉に「海神廟」あり。

41 蕭家橋 市心にあり、府より二百十歩隔たり（『宝慶』卷四）、『嘉靖』卷五では宣化坊の西南に位置する。『敬止』卷六では県前河の西側に架かる橋として、順に蕭家橋・貫橋・飯行橋を挙げる。また『康熙』卷七では北には県前街（清代）、南には大梁街にいたるという。

42 縣學 県学が唐の元和九年に創建された時は、もともと県の東に位置していた。宋の崇寧二年（1103、『康熙』卷三では三年）には県の西南に移設されたという（『延祐』卷十三）。その後、丞相史彌遠によって、嘉定十三年（1220）に宝雲寺（注(35)）の西、不隸將威果指揮廢營の地に新たな県学が建設された（新県学については〈地輿〉〈全図〉にあり）。ここにいう県学は県治の西南に位置していた時代のものと思われるが、位置は未詳。



寧波図第一等地

43 縣西河 未詳。あるいはのちの県前河の西側をいうか。

44 景福巷 未詳。なお景福院は子城の南二里半に位置し、もと水陸蓮花院といった(『宝慶』卷十一)。その西に新橋が位置する(『宝慶』卷四)。よって前文の「新排橋」は「新橋」(注(55))の誤りか。注(92)を参照。

第二等地

上則 東安郷。⁴⁵自奉化橋北西岸至市心橋。自舊酒務西曲取天寧寺橋。⁴⁶自添差僉判廳鑒街西岸至鑒橋。⁴⁷自渡母橋東岸北巷沿河東西兩岸直至廣仁巷口南岸住。⁴⁹

45 天寧寺橋 天寧寺は惠政坊の北に位置し(『宝慶』卷四、〈地輿〉〈全図〉にあり)、『嘉靖』卷五では天寧寺橋は旧名を惠政橋といった。〈地輿〉に「惠政大橋」、〈全図〉に「惠政橋」あり。

- 46 添差僉判廳鑒街 添差僉判廳は未詳。鑒街は注(47)に見える鑒橋に連なる街衢であろう。
- 47 鑒橋 状元坊下にあり、府より東北に一里隔たる。〈地輿〉〈全図〉にあり。
- 48 渡母橋 別名董孝橋とも呼ばれ、府より六十歩隔たる（『宝慶』巻四）。
- 49 廣仁巷 白衣廣仁院は子城の西に位置し（『宝慶』巻十一）、廣仁坊は白衣寺巷口にある（同巻三）。白衣寺はもと子城内（府橋街）にあったが、明の洪武初年に知府の張瑄が白衣寺の跡地に府宅を建設してのち、白衣寺は西北の普寧寺・奉聖寺の地に再建された。

〔上則〕 武康郷。自後團翁仲門前歸東取南、直至市舶司後橋⁵⁰住。并自清水碇⁵¹西取蓋家橋⁵²曲北兩岸、至鹽蛤橋西岸河下住油車巷⁵³。及自市廊能仁寺巷陳康時門前東岸取北曲東西兩岸直衝魏家巷⁵⁴肚。并自市中心橋南取新橋南王居隱賃屋。及自塔下橋⁵⁵方安仁門前大梁街巷口方安仁賃屋。

- 50 市舶司後橋 鹹塘（注(40)）の東、府より三里二十歩隔たる（『宝慶』巻四）。市舶務は鑒橋門裏に位置し（『宝慶』巻三）、〈羅城〉にあり。
- 51 清水碇 未詳。ただし羅城東側には、城内水路を城外へ流す水門に水喉碇・食喉碇・氣喉碇の三つがある。水喉碇は東渡門城壁下、都稅務の前に位置する。食喉碇は市舶務の南壁下に位置し、氣喉碇は獅子橋東、旧鄞江廟の傍らに位置する。あるいは水喉碇のことか。〈羅城〉に「水喉碇」「食喉碇」「氣喉碇」あり。
- 52 蓋家橋 未詳。
- 53 油車巷 未詳。
- 54 魏家巷 魏家巷口に宣化坊が位置する（『宝慶』巻三）。〈羅城〉には鄞県治の西に宣化坊を描く。
- 55 新橋 景福寺の西に位置し、府より二里半隔たる（『宝慶』巻四）。また『敬止』巻六には平橋河に架かる橋として、順に南にくだって竹行橋・章耆巷橋・永安橋（広濟橋）・握蘭橋・新橋・周家橋と列記する。〈地輿〉〈全図〉に「新橋頭」あり。
- 56 塔下橋 連桂坊の東にあり、府より二里三十歩隔たる（『宝慶』巻四）。あるいは後の天封橋のことか。連桂坊については注(60)を参照。ただし『嘉靖』巻五では連桂坊の東に位置する橋を塔兒橋とする。塔兒橋については『康熙』巻七には日湖に架かる橋として挙がり、傍らに石塔があり、南には明州橋、北には獅子橋にいたるといい、『宝慶』巻四と符合しない。

〔中則〕 東安郷。自四明橋下取竹行河⁵⁷下、至章耆巷口曾家匯⁵⁸一帶。自蔣家帶取福明橋⁵⁹及倉橋頭。自永濟橋西岸北沿河下東西兩岸、直至東上橋。自河利橋西岸北街兩岸至方家橋⁶⁰。自天寧寺後巷南北兩岸方家橋至李明橋⁶¹住。

- 57 竹行河 未詳。なお『宝慶』巻四では竹行橋（千歳坊にあり。『敬止』巻六では別称元禄橋）を挙げる。
- 58 章耆巷 千歳坊の南、府より二百二十歩隔たる（『宝慶』巻四）。『敬止』巻六では章耆巷橋について一名都憲橋、東は千歳坊、西は平橋街にいたるとする。〈地輿〉にあり、〈全図〉には「章耆弄」あり。
- 59 曾家匯 永安橋の東に位置する（『宝慶』巻四）。また永安橋について『敬止』巻六では広濟橋のこととする。〈地輿〉に「廣濟橋」あり。
- 60 蔣家帶 褚家橋の西に位置する（『宝慶』巻四）。蔣家帶は北宋神宗期の人で紫金光禄大夫にのぼった蔣浚明の園地（および池水）をいう（『乾隆』巻七）。蔣浚明の息子蔣璿・蔣璠が陳瓘に学んで前後して進士及第したことにより、蔣家帶の東に連桂坊が掲げられた（『乾隆』巻十二）。〈地輿〉に「紫金帶街」、〈全図〉に「蔣家塘弄」あり。
- 61 福明橋 一般に福明橋は景福寺の東に位置し（『宝慶』巻四）、石柱橋と俗称され、西に新橋、東に自角巷にいたる橋をいう（『敬止』巻六・『康熙』巻七）が、本文の前後の脈絡とうまく符合しない。蔣家帶（注60）の北に位置する普照橋は普照院から名づけられたと思われるが、この寺院は創建当時、福明院と呼ばれた（大中祥符元年〔1008〕に普照院と改称。『宝慶』巻十一）。あるいは紹興経界の当時では、普照橋を福明橋と呼んでいたのではないか。そのように理解すると、のちに出てくる三等上則・東安郷の「福明橋の西より普照院巷を取る」も無理なく穏当である。
- 62 東上橋 府の西北一里に位置する（『宝慶』巻四）。また北に孝聞坊街、南には頂戴橋にいたるという（『康熙』巻七）。〈地輿〉には「東双橋廟」、〈全図〉には「東双橋」あり。
- 63 河利橋 項家巷口にあり、府より西南に半里隔たる（『宝慶』巻四）。また東には行用庫橋、西には望京門にいたるという（『康熙』巻七）。〈地輿〉に「河利市橋」あり。
- 64 方家橋 報恩寺の後ろ、府より半里隔たる（『宝慶』巻四）。『敬止』巻六では方家橋を芳嘉橋と記す。〈地輿〉〈全図〉に「芳嘉橋」あり。
- 65 李明橋 未詳。

[中則] 武康郷。自廣惠橋南戴述⁶⁶門前取東西兩岸、直至天慶觀前止棺材巷⁶⁶。并自廣惠寺後橋蔡涇⁶⁷門前入小梁巷⁶⁷兩岸、至邊太丞屋後住。及自陸博橋⁶⁸取東北兩岸、至新河頭⁶⁹小洞橋⁷⁰住。并隱仙橋⁷¹下及天慶觀後街取紀銳香店後住。孔家巷口牢城營巷⁷²內許家小屋、并新橋南⁷³楊從政⁷⁴賃屋前取樓宗博宅前、并取塔下西岸黃卿賃屋、及泥橋下取新河頭⁷⁴戚新門前住。

66 棺材巷 未詳。

67 小梁巷 小梁街巷口に阜財坊あり（『宝慶』巻三）。〈地輿〉〈全図〉にあり。

68 陸博橋 未詳。

- 69 新河頭 新河頭に洞橋（東北廂）があり、府より二里半隔たる（『宝慶』卷四）。また新河について『談助』卷三十二では演武場東に位置するとする。〈地輿〉に冲虚觀（注23）の北に「演武厅」を描く。
- 70 小洞橋 未詳。あるいは注69にある洞橋のことか。
- 71 隱仙橋 天慶觀の後ろにあり、府より二里半隔たる（『宝慶』卷四）。また東は大池頭、西は大街に至るという（『康熙』卷七）。
- 72 孔家巷 未詳。
- 73 牢城營巷 『康熙』卷七では黄封橋について、北は県前街、南は牢城營巷に達すといい、『談助』卷二十五では小梁街の北に牢城營巷があるという。もとは罪人を配隸したが、紹興十一年（1141）、諸軍のうち老病・傷害の者を労城指揮に編入した。また乾道九年（1173）閏正月に崇節指揮に改名された。〈羅城〉にあり。
- 74 泥橋 新牌橋の東に位置し、府より三里二十四歩隔たる（『宝慶』卷四）。また北は搬柴巷、南は江心巷にいたるという（『敬止』卷六）。『談助』卷二十七によれば、泥橋巷口大街にはもと天主堂があったという。〈地輿〉に「天主堂」あり。なお、後には音通によって覓橋と呼ばれた（『康熙』卷七）。

〔下則〕 東安郷。自章耆巷⁷⁵醋坊巷⁷⁶新橋南河下⁷⁷褚家巷⁷⁸。自西岸。自甬水門裏河下北岸直取河一帯止四明嶺後。自舊酒務西南街取保聖橋⁷⁹。自廣福巷取不隸將營後⁸⁰、取君奢橋。能仁寺前巷東取西曲北取阮家橋⁸¹、并添差僉判廳後巷。方家橋至西上橋孝文巷⁸²、直至西河頭南北兩岸。虹橋五通巷⁸³東西兩岸取壯城營王通判宅前周眞家後⁸⁴。天寧寺橋下南岸沿河取王參政府後⁸⁵、曲南取州社壇并朝京水門⁸⁶。

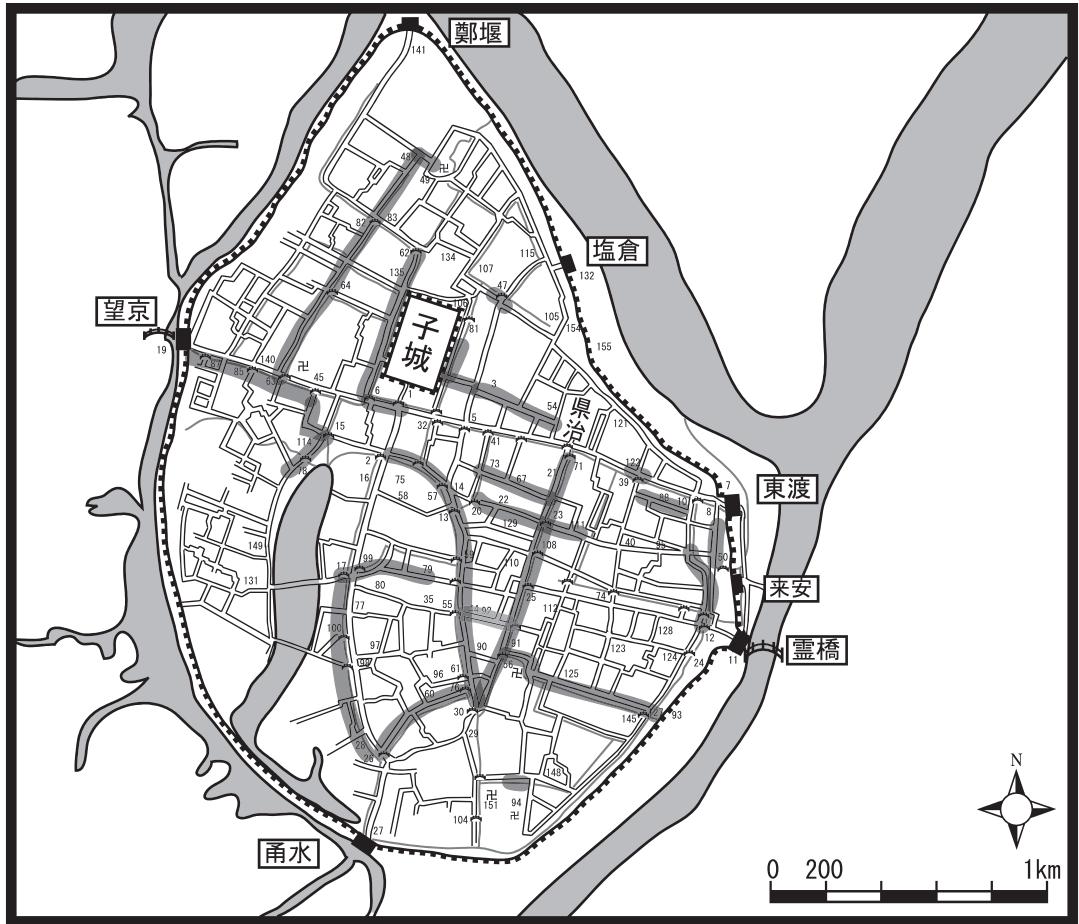
- 75 醋坊巷 『嘉靖』卷九によれば、宋代に醋務が設けられていたのでその名が付いたという。『宝慶』卷三には美祿坊に西醋庫があり、酒務の東に位置するとする（注15を参照）。〈羅城〉に「西醋庫」あり、〈地輿〉には章耆巷の北に「醋巷」あり、あるいはこの地を言うか。
- 76 褚家巷 注69にあるように、褚家橋は蔣家帯の東に位置する。そこから延びる街巷のことか。
- 77 四明嶺 おそらく鎮明嶺を言うのであろう。鎮明嶺は府治前より一里三十歩に位置する（『宝慶』卷四）。〈羅城〉に「鎮明嶺」、〈地輿〉に「鎮明嶺廟」、〈全図〉に「鎮明嶺大街」あり。
- 78 保聖橋 未詳。ただし『敬止』卷六によれば、水仙橋河（〈地輿〉に水仙廟あり）に架かる橋として感聖橋（正しくは袞繡橋。『乾隆』卷二）を挙げ、その近隣に保聖寺・崇教寺があるとする。崇教寺は〈羅城〉〈地輿〉に描かれているように、月湖の北端西側に位

置している。保聖橋は保聖寺近隣に架かる橋で袞繡橋のことか。

- 79 廣福巷 未詳。ただし〈地輿〉には県学から街巷を挟んだ北側に広福寺を描く。あるいはこの街巷をいうか。
- 80 不隸將營 禁軍の成果五十五指揮營をいう。嘉祐五年(1060)に荆南から移った就糧禁軍で、營は居養坊に位置した。嘉定十三年(1220)に營が西北廂の忠順官寨(〈羅城〉にあり)に移設される(『宝慶』卷七)と、その跡地に新県学が創建された。注(42)を参照。
- 81 阮家橋 西北廂にあり、一名を斜橋といい、府の東北半里に位置した(『宝慶』卷四)。
- 82 西上橋 府より西北に一里半隔たる(『宝慶』卷四)。また北は北門に達し、南は河利橋巷にいたるといふ(『康熙』卷七)。〈地輿〉〈全図〉に「西双橋」あり。
- 83 孝文巷 孝文巷口に修文坊あり(『宝慶』卷三)。なお『康熙』卷二では「孝聞坊」につくる。〈全図〉に「孝聞坊」あり。
- 84 西河 前後の脈絡からして、天寧寺西河を指すか。
- 85 虹橋 寿寧坊(〈羅城〉にあり)の南に位置し、府より二百十歩隔たる(『宝慶』卷四)。『敬止』卷六では西水門裏河に架かる橋を挙げ、迎恩橋・府社壇橋・虹橋・恵政橋という。なお、虹橋は月湖畔の西側にもあるが、ここでは本文の脈絡からして西水門裏河に架かる虹橋を言うのであろう。〈全図〉に「虹橋巷」あり。
- 86 壯城營 西北廂の影泉坊(蔡家巷口)北に位置する(『宝慶』卷七)。廂軍の壯城指揮はもっぱら城壁の修理にあたる。〈羅城〉に「影衆(泉の誤りか?)坊」「北(壯の誤りか?)城營」を描くも位置は未詳。
- 87 州社壇 府社壇橋は望京門内にあり(『宝慶』卷四)、子城の西南一里に位置する(『延祐』卷十五)。〈地輿〉には「社壇橋」あり。

〔下則〕 武康郷。自姚家巷⁸⁸穿庵廟巷⁸⁹。并自新橋南蔣璉⁹⁰麻宇屋頭小巷屋底。及自新橋南西壽昌寺巷入王中大⁹¹麻宇屋。自福明橋下直取樓宗博宅後巷。自祥符寺前取景福寺⁹²。鄞江門止丘家橋。自威喜門前止南寺後門周信門前⁹³。自車橋下北取楊安常庫前小橋下巷取全捷營前⁹⁴。

- 88 姚家巷 姚家巷口に葛家橋があり、府より二里三百歩隔たる(『宝慶』卷四)。元代には姚家巷に慶元路市舶提舉司が位置した。なお寧波市民政局・寧波市地名委員会作成のHP「寧波地名図」(www.nbdm.gov.cn)内の「地名文化」内「地名溯源」に載せる「棋杆巷」のページでは棋杆巷の旧名を姚家巷としている。棋杆巷は〈全図〉にあり。
- 89 庵廟巷 未詳。
- 90 西壽昌寺巷 『延祐』卷十六によれば西壽昌寺は東南隅に位置し、東壽昌寺の下院であるという。ただし乾道五年(1169)に建設されたといふ(『嘉靖』卷十八・『談助』卷二十六)、紹興經界法の施行時期とのずれがあるが不明。壽昌巷について東には天封橋がある



寧波図第二等地

とし（『康熙』巻七）、〈地輿〉に「壽昌寺」、〈全図〉に「壽昌寺弄」あり。なお〈羅城〉内の鄞県治より右下にある「壽昌寺」は東壽昌寺である。

- 91 祥符寺 子城の南一里半に位置し、もと崇福寺といった（『宝慶』巻十一）。また天封塔の北にあるという（『延祐』巻十六）。〈地輿〉に「祥符廟」あり、あるいはこの地か。
- 92 景福寺 景福寺の東に福明橋、西に新橋あり（『宝慶』巻四）。旧名水陸蓮花院といい、宋の建隆二年（961）に建設された（『延祐』巻十六）。〈羅城〉にあり。注(4)を参照。
- 93 鄞江門 羅城東門の一であったが、宝慶年間には利用されず閉ざされていた（『宝慶』巻三）。鄞江門にちなんだ鄞江廟が建てられたが、それは東南隅獅子橋の東に位置した（『延祐』巻十五）。〈羅城〉にあり、〈地輿〉には東嶽宮の左に「鄞江廟」あり。〈全図〉に「東嶽宮」あり。
- 94 南寺 南寺後橋は戚家橋の南にあり、府より一里半五歩隔たる。また南寺前に明州橋あり（『宝慶』巻四）。

95 全捷營 大觀元年(1107)に増設された不隸將禁軍の全捷指揮營。もとは威果五十五指揮營(注80)とともに居養坊に營があったが、のちに小江橋側に移動した(『宝慶』卷七)。本文直前にある「小橋」はあるいは小江橋のことか。『談助』卷十四には、海神廟が明の洪武年間に宋の威果全捷營(全捷營の誤り)の跡地に移設されたという。〈羅城〉にあり、〈地輿〉〈全図〉に「海神廟」あり(なお〈羅城〉にある「海神廟」は移設前)。

第三等地

〔上則〕 東安郷。自福明橋西取普照院巷、⁹⁶至戒香寺縣社壇。⁹⁷自保聖橋取湖橋頭。⁹⁸自韓家橋裏鑄冶巷¹⁰¹勞家橋。¹⁰²自小頭湖取水月橋。¹⁰³自鑒橋東巷口取石礮頭¹⁰⁴毛慶家住。¹⁰⁵自鑒橋西至桃源洞後、并州學¹⁰⁶西西河頭。¹⁰⁷林迪功宅西四家、元係第二等下則、無出入路、降入此等。

96 普照院巷 普照院は子城の西南二里半に位置し、旧名を福明院といった(『宝慶』卷十一)。〈羅城〉に「普照寺」あり。注(61)を参照。

97 戒香寺 戒香十方寺は子城の西南二里半に位置し、もと白檀寺といった(『宝慶』卷十一)。弘治十三年(1500)にはその跡地に宝雲寺が建設された(『敬止』卷二十六)。〈地輿〉に「宝雲寺」あり。注(35)を参照。

98 縣社壇 県治の南二里にあり(『宝慶』卷十二)。〈羅城〉に「縣社」、〈地輿〉に「南社壇廟」、〈全図〉に「社壇廟」あり。

99 湖橋 君奢橋の西に位置するとする(『宝慶』卷四)が、〈地輿〉には君奢橋の東に位置する。あるいは是ならん。

100 韓家橋 廨院のすぐ南に位置し、府より百三十歩隔たる(『宝慶』卷四)。また俗名を階嘴橋といい、東は鎮明嶺大街、西は鑄冶坊巷口にいたるといふ(『敬止』卷六)。〈地輿〉に「界嘴橋」あり。

101 鑄冶巷 未詳。韓家橋の西に位置するという(『敬止』卷六)。注(100)・(102)を参照。

102 勞家橋 未詳。ただし『嘉靖』卷五では、県社檀橋について鑄冶巷の東とし、一名を牢家橋とする。牢家橋は『宝慶』卷四では、府より百五十歩隔たり鑄冶坊巷に位置するとする。よって県社壇橋のことか。

103 小頭湖 未詳。あるいは小湖頭のことか。注(29)を参照。

104 水月橋 延慶寺の前に位置し、府より三里十五歩隔たる(『宝慶』卷四)。〈地輿〉にあり。

105 石礮頭 石礮橋は府の東北一里三十歩に位置する(『宝慶』卷四)。前後の脈絡よりして、鑒橋より東に流れる水路の先を言うのであろう。

106 桃源洞 子城内の射亭よりやや西北に出て、子城を穿って北に出るところに位置する(『宝慶』卷三)。〈羅城〉では子城東北角に描く。

107 州學 天禧二年（1018）、知明州事の李夷庚によって子城の東北一里半の地に移設された（『宝慶』卷二）。〈地輿〉に「府学」あり、〈全図〉に「旧府学」あり。

〔上則〕 武康郷。自魏家巷口入本巷西岸、至巷底祝昉門前往。自洗馬橋東取北雙營前橋下、取新寺後門巷口、直取西巷口。自廿八營前入缸井巷、止南寺後門河頭、轉取張童巷。

108 洗馬橋 新寺後門に位置し、府より二里十八歩隔たる（『宝慶』卷四）。『康熙』卷七には、東に霓橋巷（注74）、西に新街（〈全図〉にあり）に達すという。

109 北雙營前橋 未詳。

110 新寺後門巷 洗馬橋にあり（注100）。『談助』卷二十五には、東には新排橋、東北には新街、西には漁欄橋、南には握蘭橋に達すといい、沙井巷とも称すという。〈地輿〉に「沙井頭」あり。

111 廿八營 廂軍の崇節二十八指揮營のこと。天慶觀（注23）の前にあり（『宝慶』卷七）。〈羅城〉には天慶觀の右に「元八營（廿八營）」を描く。

112 缸井巷 『康熙』卷七には、破石橋について南は缸井巷、北は冲虚觀前街にいたるといふ。また『嘉靖』卷九では江井巷につくる。〈地輿〉に「浦石河頭」「家井巷」あり。

113 張童巷 未詳。

〔中則〕 東安郷。自崇教寺巷口一帯。鹽橋北巷并州學河東岸直至鹽倉橋。能仁寺東巷街西岸直至石硯頭橋槐陰巷。并河岸土地橋石版巷西曲取興聖院東小路、及曲取孝文巷。取白塔巷西曲南、至西河頭兩岸。

114 崇教寺巷 崇教寺側に酒務橋が位置する（注15）。〈地輿〉には醋務橋の左下に「崇教寺」あり。

115 鹽倉橋 鹽倉前にあり、府より一里半隔たる（『宝慶』卷四）。また鹽倉門は羅城の北門であり、鹽倉より名づけられ、塩の納入時に開門された（『宝慶』卷三）。〈羅城〉に「塩倉」「塩倉門」あり、〈全図〉に「塩倉門」あり。

116 槐陰巷 未詳。

117 土地橋 未詳。

118 石版巷 西北廂石版巷には禁軍の威勝指揮營あり（『宝慶』卷七）。〈全図〉には子城の左に「威勝營」を描くが位置は未詳。なお、注100の石版巷とは別の街巷である。

119 興聖院 子城の西四里に位置し、もと牆西院と号した（『宝慶』卷十一）。また羅城の西壁下にあるとする（『延祐』卷十六）。『談助』卷六には望京門の北という。位置は未詳。

120 白塔巷 未詳。

〔中則〕¹²¹ 武康郷。自後市邊家客店前西取縣後、至石磧姚振門前、取南至能仁寺巷、東住廊頭草營巷。¹²²自景清寺前東取興教寺巷口、西取景德寺後街巷口、轉取小巷魏璿門前、北取泥橋下。自波斯團止酒務營前、轉取丘家橋、直取石版巷、取白塔下朱惠屋後、取程房門前、取郁家巷。¹²⁹

- 121 後市 『嘉靖』卷九には県治（明代）の後ろ、魏家巷の北に位置し、西には乾磧頭にいたるといふ。また『談助』卷十三には、開明坊・県治（清代）の前後にはもと三つの市があるとし、大市は県治の前、東牌坊より西牌坊まで、中市は県治の東、按察分司の前（開明橋下）、後市は県治の後ろ魏家巷に位置し、北には干溪頭（〈全図〉に「甘溪頭」あり）にいたるといふ。〈全図〉に「後市」あり。
- 122 草營巷 『談助』卷十四には、二境廟について門の左右に額があり、一つは楊家楼、一つは草營巷と記すといふ。〈地輿〉にあり、〈全図〉に「二境廟弄」あり。
- 123 景清寺 汪家木橋の西に位置し、府より一里十歩隔たる（『宝慶』卷四）。『嘉靖』卷五には、汪家木橋について嘉賓堂の東に位置するとし、嘉賓堂については『康熙』卷七に君子宮内に位置したといふ。〈地輿〉〈全図〉に「君子宮」あり。
- 124 興教寺 南には獅子橋あり（『宝慶』卷四。注⑭）。『延祐』卷六には、東南隅の邱家橋（注⑭）に位置するといふ。また景清巷口の東に興教橋が位置し、府より四里半五十歩隔たる（『宝慶』卷四）。
- 125 景德寺 その東に史府橋があり、府より一里半隔たる（『宝慶』卷四）。また子城より東南二里隔たり、旧名を鄞江院といった（『宝慶』卷十一）。『嘉靖』卷五に史府橋は沙泥街にあるとする。
- 126 波斯團 ペルシア・アラブ系の同業組織をいうか。位置は未詳だが、獅子橋（注⑭）北にイスラム系寺院である回回堂（『至正』卷十）が位置し、その付近か。
- 127 酒務營 清務指揮營のこと。もとは権酷をになう廂軍。營は東南廂鄞江門裏に位置する。禁軍への選抜や死亡などによって人員が減っても補填しなかったためにやがて廃止され民居となった（『宝慶』卷七）。
- 128 石版巷 『康熙』卷二によれば東南隅に東石版巷あり。〈地輿〉に「石版街」、〈全図〉に「石板廟弄」あり。注⑭の石版巷とは異なる。
- 129 郁家巷 『談助』卷二十五によれば、また司巷ともいい、郁家廟があり、のちに毓嘉廟に改名されたといふ。〈地輿〉に「毓嘉廟」あり。

〔下則〕¹³⁰ 東安郷。自保聖寺西河下取王參政府、西取州社壇。自聖功寺前取橋頭西畔、取袁登仕宅前。¹³²自鹽倉門西取達信門、轉取雄節營前、曲取教場東巷、至州後匯頭。自白塔巷西巷口北岸取鄭堰門頭、東取舊法場威勝營前、取東村富家後。自虹橋北岸巷曲西小五通巷、曲取應家巷宜秋巷。¹⁴¹自興聖院東、并院子後沿牆下直取鄭堰門頭。

- 130 王参政府 『嘉靖』卷十六には県治の西南二里、西社壇橋（注⁸⁷）に位置する。高宗朝の参知政事王次翁（1079－1149）が致仕後に構えた居所。位置は未詳。
- 131 聖功寺 子城の西南四里半に位置する（『宝慶』卷十一）。『敬止』卷二十六には、聖功巷にあり、聖功巷は月湖西の尚書橋巷とする。〈地輿〉に「大尚書橋」あり。
- 132 鹽倉門 羅城北門の一つ。塩の納入時に開門された（『宝慶』卷三）。注¹¹⁵を参照。
- 133 達信門 羅城北門の一つだが、宝慶年間には閉ざされ利用されなかった（『宝慶』卷三）。門裏に省馬院があり（『宝慶』卷三。〈羅城〉にあり）、『延祐』卷十五には達信廟があったという。位置は未詳。
- 134 雄節營 雄節指揮營のこと。熙寧元年（1068）に廂軍より強壯の者を選んで教閱崇節指揮とし、熙寧六年（1073）に雄節指揮に改名された。その後、元豊三年（1080）閏九月に禁軍へと昇格した。営は教場の東北に位置する（『宝慶』卷七）。〈羅城〉には「教場」の右に「北営」を描くが、雄節營のことか。
- 135 教場 子城の西北に位置し、東西百歩、南北九十七歩、面積四十畝一角四十歩の広さを持つ（『宝慶』卷三）。〈羅城〉にあり。
- 136 鄭堰門 羅城西北門の一つ（『宝慶』卷三）。のちに永豊門と呼ばれた（『延祐』卷八）。〈羅城〉にあり、〈地輿〉に「永豊門」あり。
- 137 舊法場 未詳。
- 138 威勝營 大觀元年（1107）十一月に新設された禁軍の威勝指揮營のこと。営は西北廂石版巷（注¹¹³）に位置する（『宝慶』卷七）。位置は未詳だが、〈羅城〉には「北（壯）城営」（注⁸⁶）と「興聖寺」（注¹¹⁹）の間に描く。
- 139 小五通巷 未詳。
- 140 應家巷 西北廂應家巷口に宜秋坊あり（『宝慶』卷四）。位置は未詳。
- 141 宜秋巷 西北廂應家巷口に宜秋坊あり（『宝慶』卷四）。〈羅城〉に「宜秋坊」あり。位置は未詳。

〔下則〕 武康郷。自陸家巷¹⁴²・夏家巷¹⁴³・張秀才巷¹⁴⁴、并獅子橋取秋家巷¹⁴⁵後周信屋¹⁴⁶後、轉取奉聖院前¹⁴⁷、曲取開元寺後¹⁴⁸。

- 142 陸家巷 東南廂の陸家宅橋については連桂坊（注⁶⁰を参照）の西に位置し、府より二里隔たる（『宝慶』卷四）。位置は未詳。
- 143 夏家巷 未詳。
- 144 張秀才巷 未詳。
- 145 獅子橋 興教寺の南、府より二里半隔たる（『宝慶』卷四）。また獅子橋の東に東嶽奉聖行宮あり（『延祐』卷十五）。『敬止』卷六では、南には塔兒橋、北には車橋街にいたる

という。〈地輿〉にあり、〈全図〉に「東嶽宮」あり。

146 秋家巷 未詳。

147 奉聖院 子城の東南二里に位置し、もと浄居禅院といった（『宝慶』卷十一）。ただし『延祐』卷十六では西北隅衍慶坊にありとするが、前後の脈絡からすると、東南廂にあるのがふさわしい。西北隅の奉聖寺については、明の洪武三年（1370）に普寧寺・奉聖寺の跡地に白衣講寺が移設されており、この地をいうか。

148 開元寺 県治の南二里に位置し（『宝慶』卷十一）、また五臺開元寺ともいう（『延祐』卷十六）。〈羅城〉にあり、〈地輿〉に「五臺寺」、〈全図〉に「五臺寺弄」あり。

〔末則〕 東安郷。自觀音寺前¹⁴⁹取鮑知府宅前¹⁵⁰。自甬東門牆下延慶寺前¹⁵¹。自達信門裏西沿牆取北郭舊法場。自大教場後至此牆下¹⁵²。自興聖院前福田院直取應家巷・宜秋巷頭毛慶家¹⁵³。至蜃池頭曲取鹽倉橋¹⁵⁴。

149 觀音寺 また能仁觀音院ともいい、県治より西南二里半、月湖西畔に位置する（『宝慶』卷十一・『延祐』卷十六）。明の洪武十四年（1381）にはその地に廣盈倉が設けられた。清の順治十年（1653）にはその地に常平義田書院が創建され、康熙二十五年（1686）には整備されて月湖書院に改称された（『談助』卷十七）。〈地輿〉に「月湖書院」あり、〈全図〉に「書院弄」あり。

150 鮑知府宅 宋代に明州の知州（知府）となった鮑姓には、康定年間中（1040—1041）に就いた鮑亜之と、嘉祐年間中（1056—1063）に就いた鮑軻がいる（『宝慶』卷一）が、いずれかは不明。また位置も未詳。

151 延慶寺 子城の南三里に位置し（『宝慶』卷十一）、日湖にあり。〈羅城〉〈地輿〉〈全図〉にあり。

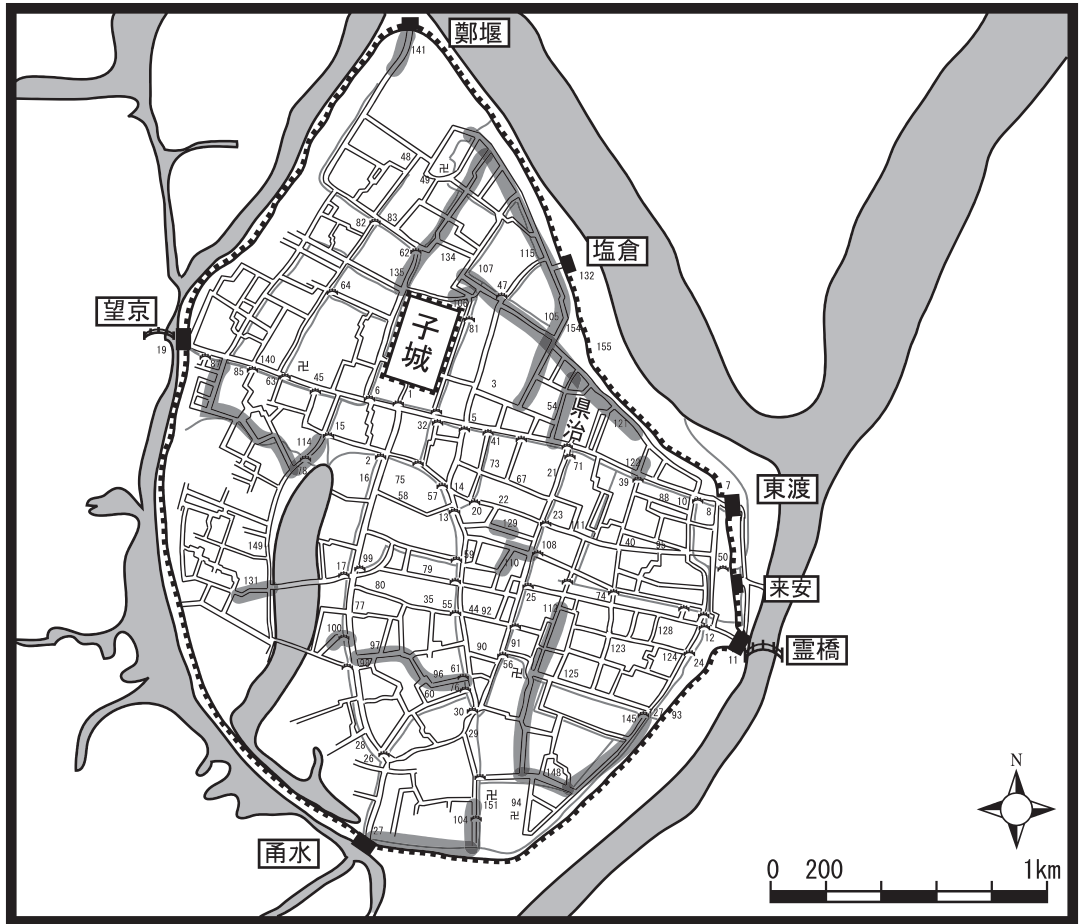
152 大教場 未詳。注〔5〕の教場のことか。

153 福田院 未詳。

154 蜃池頭 『嘉靖』卷五には県治の西北一里に位置し、また『談助』卷九には蛟池・蜃池はもと一つの池で、塩倉門東の城壁下に位置するという。〈羅城〉には塩倉門右に描く。

〔末則〕 武康郷。自石硯頭取蜃池頭資聖院園地¹⁵⁵、曲東小路官城脚下。自陰溝巷入取范垠屋後¹⁵⁶。自延慶寺水月橋南河城下取東曲轉北。

155 資聖院園地 資聖院は県治の東北一里半に位置し、もと漁浦門外院と称した（『宝慶』卷十三）。明の天啓元年（1621）に江心庵が建てられた（『康熙』卷二十一）。〈地輿〉〈全図〉に「江心寺」あり、ただしその園地については位置未詳。



寧波図第三等地

156 陰溝巷 未詳。

〔注〕

- (1) 斯波義信「宋代の都市化を考える」（『東方学』102、2001年7月）、同『中国都市史』（東京大学出版会、2002年）。
- (2) 宋代都市の景観として伝・張昞端『清明上河図』を分析した研究に、伊原弘編『『清明上河図』を読む』（勉誠出版、2003年）などがある。
- (3) 斯波義信「宋都杭州の商業核」（『宋代江南経済史の研究』汲古書院、1988年）、梅原郁「宋代の開封と都市制度」（『鷹陵史学』3・4、1977年7月）、同「南宋の臨安」（『中国近世の都市と文化』京都大学人文科学研究所、1984年）、久保田和男『宋代開封の研究』（汲古書院、2007年）、高橋弘臣「南宋臨安の住宅をめぐる」（『愛媛大学法文学部論集』人文科学編19、2005年）、同「南宋臨安の下層民と都市行政」（『愛媛大学法文学部論集』人文科学編21、2006年）、同「南宋臨安郊外における人口の増加と都市領域の拡大」（『愛媛大学法文学部論集』人文科学編23、2007年）、同「南宋臨安の三街」（『愛媛大学法文学部論集』人文科学編26、2009年）、同「南宋臨安における禁軍の駐屯とその影響」（『愛媛大学法文学部論集』人文科学編27、2009年）等。
- (4) 伊原弘「唐宋時代の浙西における都市の変遷—宋平江図解説作業—」（『中央大学文学部紀要』

- 史学科24、1979年)、「宋代浙西における都市と士大夫—宋平江図坊名考—」(『中嶋敏先生古稀記念論集』下、1981年)、礪波護「唐宋時代における蘇州」(『中国近世の都市と文化』京都大学人文科学研究所、1984年)。
- (5) ピーター・ボル「唐宋変遷の再考—アメリカにおける宋史研究の最近の傾向について—」(『史滴』17、1995年12月)
 - (6) 斯波義信「寧波の景況」附「図8 清末の寧波市」(『宋代江南経済史の研究』汲古書院、1988年)
 - (7) 梅原郁「宋代都市の税賦」(『東洋史研究』28-4、1970年3月)
 - (8) 山崎覚士「貿易と都市—宋代市舶司と明州—」(『東方学』116、2008年7月)
 - (9) 『寧波市地名志』については本田治氏(元立命館大学文学部教授)にコピーをいただいた。ここに記して謝意を表す。
 - (10) ただしよく利用される宋元地方志叢書・宋元方志叢刊本には図を載せず、中国方志叢書本(華中地方575号『浙江省四明志』)には載せてある。
 - (11) 前掲梅原氏「宋代都市の税賦」

〔附記〕

本稿における史料データの整理、地図の作成等にあたって辻高広氏(大阪市立大学非常勤講師)、金賢氏(元佛教大学研究員)に協力いただいた。

本研究は2011年度 佛教大学特別研究費による研究成果の一部である。

(やまざき さとし 歴史学科)

2012年10月26日受理